

◆ 人権の歴史／奴隷の歴史（続き）

同じ授業で、中国のジーンズ工場で働く労働者を描くドキュメンタリー（『CHINA BLUE』）をみる。郷里を遠く離れた工場で深夜におよぶ単純な長時間労働をし、布きれで仕切られた狭いベッドの上にはしかプライベートな空間はない。年齢チェックもいい加減なようだ。作業台の上には毎日、山のようにジーンズが積まれる。延々とその裏側のほつれ糸を切るのが仕事なのである。ウォルマートの関係者が視察に訪れて、「職場環境は良いよね」などというシーンでは教室に失笑が漏れた。

ドキュメンタリーのあとは質疑応答に入るが、主になされたのは、過酷な長時間労働への批判だった。教師が質疑の最後で「彼らは奴隷だと思うか？」と聞く。最初に手を挙げた学生の答えは、「奴隷ではない」である。なぜなら、「無理矢理連れてこられたわけではなく、良い条件と聞いて自発的に来た。一応の自由もあるのだし、給料も支払われているから」。これは最初に挙げた意見ではあるけれども多数派ではないようで、次の二人は条件付きで「奴隷だと思う」と答えていた。

「奴隷」の定義を狭く採れば、ドキュメンタリーで描かれた彼女らは奴隷ではない。ただもちろん最初に答えた学生もこれが「奴隷的」であるのは認めるところだろう。どのように過酷な労働条件であれ、契約に同意してきているというのであれば、確かに定義上、奴隷ではないのだ。契約は自由意志によってなされるもので、そのような自由を持たないものを「奴隷」というはずだからである。

一方で、「奴隷」は歴史学や社会科学の概念であるという以上に一般の名詞であるので、その用法にはもちろん幅がある。「恋の奴隷」というように、比喻で使う場合もある。言葉をめぐるそうした「幅」をどのように見定め、概念としてコミュニケーションの道具にしてゆくかは、もちろんその問題関心によるものである。

ただ問題は、「奴隷」をめぐる歴史的知識やイメージが貧困であれば、その「幅」の存在じたいを知ることができないということだ。その場合、自分の知っている少ない事例をもとに「奴隷」かどうかの判断をしてしまうだろう。だが奴隷をめぐる議論をする際に重要なのは、たんに定義を厳密に定めるということではなく、その定義が、一定の「幅」のなかでのなんらかの問題関心による「選択」であるということをしゅうぶん理解しておくことである。

自分の勉強不足を披露してしまっただけで申し訳ないのだが、良い示し方もほかに用意がないので、自分のみた映像作品を使わせてもらおう。

歴史ドラマ『ROME』である。カエサルの台頭からアウグストゥスの即位までを描く、アメリカのHBOとイギリスのBBCが共同制作したドラマである（2005-2007年。日本での放映は2010年頃。ちなみにR-15指定）。そこには、沢山の「奴隷」が出てくる。サディストの女主人公（カエサルの姪でオクタヴィアヌスの母アティア）のストレスのはけ口に鞭で叩かれる（おさだまりの？）「奴隷」もいれば、カエサルの秘書・会計係で参謀や話し

相手を務める「奴隸」もいる。

特に後者のポスカという名の奴隸が良い味を出していて、奴隸イメージを広げてくれる。彼はカエサルの死後、その遺言で解放されるのだけれども、生前の二人の仲は、一般にイメージされる主人と奴隸の関係というよりも、友人同士、あるいは悪人とその共犯者というようにも描かれている。つまり、彼の存在によって、頭脳労働に携わる奴隸もいたということに改めて気づくのである。(彼は解放後、奴隸時代の貯蓄を使い、年の離れた金遣いの荒い女性と結婚する) あるいは、貯めた金で自分自身を「買う」ことで解放される奴隸もいたようだ。

投資に見合った能力を奴隸に期待するというのであれば、もちろん頭脳労働をする奴隸がいてもおかしくはない。現在の私たちが賃金を得てしている労働のうちの数多くが、奴隸によって行われていたと考えてよい。

このポスカの場合、その出自は、文明の進んだギリシャ人である。彼の場合、奴隸狩りではなく戦争によって生じた奴隸である。それゆえ事情はいわゆる「奴隸狩り」でイメージされるものとは少し違う。「奴隸狩り」には、何の問題もなく生活していた人びとを突然襲い、無理矢理連れてくるというイメージがあるけれども、戦争が生み出す奴隸は、武力紛争の結果、敗北・降伏し、生殺与奪を相手に預けざるをえなくなった結果生じたものだという考え方があった。つまり、助命と引き替えに奴隸となったのである。誇りより命を優先する者にもはや自由はない、ということなのであった。

あるいはアフリカからアメリカに連れてこられた奴隸も、ヨーロッパ人が直接奴隸狩りを行ったのではなく、アフリカの国内の戦争で生じた奴隸を購入したとされていた。ヨーロッパ人は、売られていた物をただ買ったにすぎない(=すべては業者のやったことである)と。

歴史から「奴隸」の事例を数多く用意し、それを可能にした状況やロジックを知り、そのイメージを増やせば、歴史上さまざまなかたちを取る奴隸に対する定義が、これを採り上げるわれわれにとってのある特定の「選択」であることを理解することができるだろう。とすれば「性奴隸」といわれて非難されている従軍慰安婦の問題に関しても、おおよそ近代国家においてそれが直接手を下す「奴隸狩り」が行われるはずはなく、だからといって「奴隸的なもの」が全く存在しないということにもならない。だから私たちが見定めておきたいのは、どのような問題関心によって何を「奴隸」とみなすかということである。

「概念」「歴史用語」とは、もちろん私たちの歴史理解を可能にする重要な道具である。と同時に、それがひとつの「選択」によるものであることを忘れ、それに対して形式的な(=問題関心に基づかない)定義を決めてしまえば、逆に私たちの歴史理解を狭くもしてしまうものでもある。もう少し、「概念」「歴史用語」の働きの、注意深くあってもよいだろう。「実証できる=論破できる」とは少し違った歴史理解の回路を考える必要がある。何よりも、日本の歴史理解における「奴隸」イメージの貧困が、「性奴隸」とされて非難されてもいる従軍慰安婦をめぐる論争に足枷をはめてしまっていると考えられるのだ。